

## 審査の結果の要旨

氏名 高橋元貴

本論は近世巨大都市江戸の町人地に関する都市史研究であり、都市内のいわゆるインフラストラクチャーである道路・堀川がいかんにして維持・存続されてきたかが論文全体を貫くテーマになっている。江戸に関する都市史研究はすでに膨大な蓄積があり、日本近世史のみならず歴史地理学、考古学、国文学などの分野からの貢献に加えて、建築史分野からの成果も重要な位置を占めている。そうした分厚い先行研究を正面から受け止めつつ、独自の観点から浮かび上がらせた近世江戸の都市像はきわめて魅力的であり、行論中に明らかにされた知見も多彩で豊富である。建築史分野からのひさしぶりの本格的な都市史研究と評価することができる。

「序章」は本論と直接に関連する先行研究のレビューであるが、圧巻は第一章の江戸都市史研究における建築史学の成果と課題と題した重厚な研究史整理である。400字換算で200枚に及ぶ江戸都市史のレビューは明治期からごく最近の研究動向までをカバーしており、日本近世史の都市社会史的研究、建築史の空間史的研究はもとより、考古学など周辺領域の江戸研究まで広く行き届いた内容である。本章を一読するだけでも著者が対峙すべき既往の江戸研究の壁の高さをよく示しているし、現時点における江戸の既往研究史整理としてはもっとも完成度の高いものである。

第二章から第五章までが本論の中心部分をなす論考であり、江戸の道空間支配・管理（第二章）、道路の維持（第三章）、堀川の存続様態（第四章）、河岸空間（第五章）が検討される。第六章（庇空間の取り調べ）、第七章（町空間をささえるソフトウェアとしての鳶の消火・復興活動）は前四章とはやや論点が異なるが、空間を支える社会集団への視線が打ち出されており、全体として江戸町人地の社会=空間構造に分析の主眼を置くという研究姿勢が鮮明である。以下、各章の概要と得られた知見についてみていく。

第二章は17世紀半ばから18世紀末にかけての江戸町人地における道空間の支配と管理体制を論じている。近世初期における町共同体による道空間の慣習的な維持管理は18世紀中頃から幕府側の管理支配の道具として自覚されることとなり、結果的に幕府と町人との間の相補的な制度的関係として確立していくプロセスを跡づけている。幕府の往還をめぐる多様な実態の把握と管理は許認可体制のなかでかたちづくられていったことになる。

第三章は「持場」をインフラ維持の視点から論じた章である。近世町人地は町内空間を持場負担という原則にもとづいて維持管理されてきたが、本章では

個別町と場末の町方地域を事例として持場の存在形態を空間的観点から復元し、江戸市中における道空間の維持管理は、道路としての機能を維持するものと治安維持に力点が置かれたものの2類型があることを明らかにした。

第四章では、17世紀後半から19世紀半ばまでの長期間における江戸町方中心部における堀川の存続形態を論じたもので、本論の白眉となる章である。江戸の堀川は定期的な浚渫によって維持されていたという通説をくつがえすかのように、一部の堀川では通船機能に障害が出るような「川埋り」が発生していたこと、浚渫なしでも堀川機能が維持できた事例などが明るみに出た。これは一面において「放置」「放棄」という側面が指摘できるが、他方でインフラはつねに維持管理されていたわけでないという事実をどのように捉えるかという新たな問いの提起に結びついたと言える。

第五章は江戸の堀川沿いの土地＝河岸地の存続の意味を神田堀という具体的な場とそこに凝集する材木仲間商という特殊な社会集団の内部構造との関連で論じている。神田堀もまた自然の堆積作用によって「川埋り」していったが、材木仲間はそこを貯木場として利用していたのではないかという仮説が導かれている。

第六章は文化年間に町奉行が実施した庇地調査の意味を取り上げる。庇地は町屋敷に付属する部分か、あるいは「公共」の道に一部なのか、この空間にかかわる両者のせめぎ合いは江戸に限らず多くの近世都市に見出すことができる。本章は具体的な絵図史料が残る文化年間の「町々取調懸」を読み込むことによって、19世紀初頭が幕府の都市空間把握の一転換点であったと推論する。

第七章は、町人地の空間を担った社会集団分析である。このような視角は日本近世史で近年ようやく深化してきた方法であり、それを建築史の立場から捉え直した力編ということができる。ここでは安政元年の神田多町の火災を事例に、鳶による消火・土木普請工事の実態に迫り、町人地存続のために彼らの労働が不可欠であったと結論づける。

終章では、以上第二章から七章の本論部分で得られた結論を総合的に検討し、都市史的観点からみた近世中後期の江戸の時代区分論を提示している。

以上、本論は近世江戸の実態に迫るために膨大な江戸近世史料を博捜し、あくまで空間的立場からの考察という姿勢を保持して論じた「江戸インフラ都市論」のもっとも良質な部分がよく示された労作ということができる。すでに重厚な蓄積をもつ江戸都市史研究を確かな基盤として提示された新たな江戸都市史研究は、江戸に限らず今後の都市史研究全体の発展にとって大きな貢献となることは確実である。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以 上